

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

川崎医療福祉学会 第20回研究集会

平成13年 6月 7日(木)

研究発表

1. 車イス使用高齢者の身体拘束と座位保持に関する考察
— 身体拘束をしないための車イス —
川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉環境デザイン学科 ○齋藤 芳徳
2. 高齢者見守りシステム開発における人間性への配慮
— 高齢者を対象とした意識調査を手掛かりに —
川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 医療情報学専攻(博士課程) ○品川 佳満
3. 語彙判断課題における漢字文字列の心像性, 頻度, 親密度および規則性の効果
川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 感覚矯正学専攻(博士課程) ○尾川亜希子
川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 種村 純 寺尾 章
4. ヒトにおける含硫アミノ酸代謝について
川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻(博士課程) ○中村 博範
岡村一心堂病院 梶川 梨恵
川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 朝倉 洋平 浅岡 美穂
坪井 和美 産賀 敏彦
5. がん患者の体験とその意味についての研究 — 文献を中心に —
川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健看護学専攻(修士課程) ○雲 かおり 三輪 祐子
梶谷みゆき
川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科 太湯 好子
6. 足関節内反捻挫における各種装具, テーピングの有効性の検討
川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科 ○長尾 光城 柚木 脩

学会運営委員長挨拶 寺尾 章 教授

研究発表要旨

車イス使用高齢者の身体拘束と座位保持に関する考察

— 身体拘束をしないための車イス —

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉環境デザイン学科 齋藤 芳徳

身体拘束をしないための車イスの在り方を探ることを目的として, 特別養護老人ホームの車イス使用者に, モジュール型車イスを約2ヶ月間試用してもらい時系列的な調査を行った。車イスの変更・調

整により11名中8名の抑制帯が外れる結果となり, ティルト+リクライニング機構を備えたモジュール型車イスを用いてシーティングを行うことにより, 抑制帯の外れる可能性が高いことが示された。

高齢者見守りシステム開発における人間性への配慮

— 高齢者を対象としたアンケート調査を手掛かりに —

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 医療情報学専攻 品川 佳満

高齢者自身のプライバシー侵害（厳密には抵抗感の程度）の問題に配慮した見守りシステム開発の方向性を見出すことを目的に、高齢者を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、高齢者は、機械による見守りに対して安心感もあるが、同時に機

械に対する抵抗感もあることがわかった。また、機械による見守りを考えた場合は、姿を撮影しない赤外線センサなどを利用した方法によると、トイレや浴室など、どの場合においても抵抗感が少ないことがわかった。

語彙判断課題における漢字文字列の心像性、頻度、親密度および規則性の効果

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 感覚矯正学専攻 尾川亜希子

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 種村 純 寺尾 章

健常者10名を対象として語彙判断に関する処理過程、処理方略の相違について漢字単語の特性の相違から検討した。正答率には、頻度と親密度の効果が関与した。反応時間には、心像性、頻度、親密度、規

則性の効果が認められた。規則語については意味処理と音韻処理の並列処理、不規則語は、意味処理と音韻処理の継時処理が行われていると考えられた。

ヒトにおける含硫アミノ酸代謝について

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻 中村 博範

岡村一心堂病院 梶川 梨恵

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 朝倉 洋平 浅岡 美穂

坪井 和美 産賀 敏彦

含硫アミノ酸の硫黄の最終代謝産物は硫酸とタウリンで、それぞれの生理作用を果たした後、尿中へ排泄される。今回、日本人女性58名の12時間絶食後の尿中への硫酸またはタウリン排泄量とタンパク質代謝の指標である尿素排泄量との相関を調べた。そ

の結果、総硫酸（遊離硫酸+エステル硫酸）、遊離硫酸、総硫酸+タウリン排泄量と尿素排泄量とはそれぞれ有意な正の相関を示した。また、総硫酸とタウリンの排泄比率は16:1であった。

がん患者の体験とその意味についての研究

— 文献を中心に —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健看護学専攻 雲 かおり 三輪 祐子

梶谷みゆき

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科 太湯 好子

がん患者の体験とその意味づけについて、文献研究を行った。その結果、がん患者の体験は、人間としての生と死に直面する全人的痛みに関連するものであり、身体的・精神的・社会的・霊的要素からなっ

ていた。また、体験の意味づけは、自己及び他者との関係性に関連するものであった。がん患者は、自らの苦痛の体験も、意味ある体験として意味づけしていこうとしていた。

足関節内反捻挫における各種装具、テーピングの有効性の検討

川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科 長尾 光城 柚木 脩

スポーツ外傷と障害でもっとも頻繁にみられるものの一つが足関節内反捻挫である。スポーツ現場ではテーピング、装具のいずれにするか、その選択に苦慮している。またどの装具が適しているかや費用に関する検討もされず漠然と使用されているのが現状

である。そこで現在使用頻度の高い各種装具、テーピングについて、装着感、固定性、価格について検討した。その結果テーピングの有効性と2つの装具の固定性が高いことが示唆された。